



子どもたちがステージに立った記念日

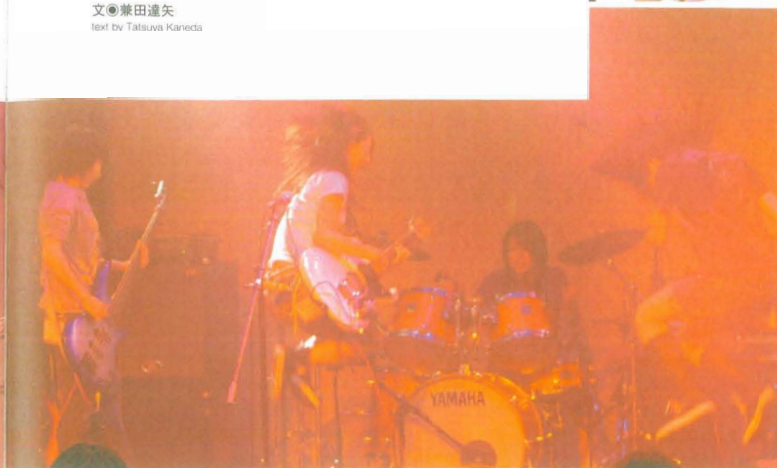
おとコトひろば LIVE 2005

小中学生作詞作曲コンテスト

Songwriting Contest for Kids

FMPキッズプログラムの柱のひとつ「おとコトひろば～小中学生作詞作曲コンテスト」(<http://www.otokotohiroba.com/>)に集まった子どもたちが渋谷の街で出会った。同サイトへの応募作、約400の中から選ばれた14作を、作詞・作曲をした子どもたち自らがワクワクドキドキしながら披露目。幸福な「初ステージ」体験は、彼ら彼女たちに何をもたらしたのか――。

文◎兼田達矢
text by Tatsuya Kaneda



歌詞だけの応募も朗読でOK 初対面のふたりの演奏も

去る10月30日、SHIBUYA BOXXで「おとコトひろばLIVE2005～小中学生作詞作曲コンテスト」が開かれた。このイベントは、子どもたちが音楽に直接触れる機会を少しでも増やすことを目的に音制連が進めているFMPキッズプログラムの一環として、特定非営利活動法人CANVASとの共催という形で行われたもので、CANVASが運営するサイト「おとコトひろば」に寄せられた約400作品のなかから選ばれた14作品が披露された。

ステージに登場した未来のアーティストの年齢は小学校3年生から中学3年生まで幅広く、もちろんその表現のタイプもじつにさまざま。特に、歌詞だけを応募してきた作品も朗読という形でピックアップすることにしたために、手あかにまみれていない小学生の思いと言葉が本人のパフォーマンスで披露されること

になり、それはプロフェッショナルの熟練した技とはまたひと味違う、しかし確かな説得力を持つ表現として満員の聴衆に強いインパクトを与えた。また、インストゥルメンタル作品もピックアップされ、中学2年生の少年がなかなか見事なキーボード演奏で美しいメロディを聴かせた。もっとも、その作品同様に、あるいはそれ以上に印象的だったのはそんな美しいメロディと演奏を聴かせた少年が将来は物理学者になりたいと話したことで、束の間豊かな音楽的センスを持ち合わせた物理学者が登場する未来を夢想することにもなった。そして、



ステージに集合した、この日出演した子どもたち。

「おとコトひろば」ではサイト上で歌詞やメロディをやりとりするなかで普通なら出会うことはなかったであろう子どもたちを年齢差、地域差を超えてつなげていくことにもなったが、そうした交流をつなげていた千葉県の中学生と秋田県の中学生がふたりで作った作品をみんなに披露するこの日、ふたりも初めて対面するという感動的な場面も生まれた。お互いの顔や声、話し方や身ぶり、そして何よりも実際の人柄を知り合うことで、ふたりの間にまた新しい作品がきっと生まれることだろう。

音楽への先入観を払拭し 裾野を広げる試み

この日のイベントは、作品の優劣を決ることがいちばんの目的ではなかったが、それにしてもグランプリを受賞した埼玉県の小学6年生、南奈那さんの作品「星砂のメモリー」は楽曲のクオリティは高く、伸びやかなヴォーカルはとてつもなく清潔で、はっきりと才能を感じさせる1曲だ。こうした

内容を持った楽曲が1回目のグランプリ曲になったことは、この後に続く子どもたちにとっても大いに励みになるだろうし、それがこの「おとコトひろば」の企画をさらに活性化することにもつながっていくだろう。

そもそも「おとコトひろば」は、コンサート助成金制度(本誌3月号参照)と並んで、FMPキッズプログラムの二本柱のひとつだ。現代の日本にはあふれかえるほどの音楽情報があるものの、子どもたちが音楽を生で体験する機会はずいぶん多くないだろうし、作詞や作曲、楽器演奏が「特別な才能がないとできない」と思われがちであることも事実。そんな現状と先入観を払拭したいという思いが音制連にはある。子どもにも体験したアーティストの素晴らしいパフォーマンスや、音楽で自己表現することの楽しさを体験することが、良質な音楽リスナーの裾野を広げることになり、結果としてアーティストを志したり、音楽の仕事に携わることを目指すようになるケースも多いのではないだろうか。そんな思いから今回のプログラムはスタートした。音

楽業界関係者であれば、物事の本質的なことがすべてあらわになるライブという現場の濃さをよく承知しているだろうが、この企画でもやはりライブの現場で起こった出来事のひとつひとつが今後につながる大きな説得力を生み出したことは間違いないだろう。

ライブの強さを実感 大人にも与えた活力

集まった作品とそれを披露したパフォーマンスの素晴らしさ、会場を満員の聴衆が



審査員はサエキけんぞうさん(ミュージシャン/作曲家)、中村伊知哉FMP総研所長などが務めた。

埋めたこと、などなど運営スタッフの手ごたえもかなり大きかったはずだ。ステージで歌い演奏する友人や兄弟の姿を目の当たりにして刺激を受けた子どもも少なからずいたに違いない。音楽を伝えるメディアはどんどん進歩し、ますます多様化しているが、音楽を伝えるということに関するライブというメディアの強さをあらためて実感する現場でもあった。

ところで、この日披露された14の作品が持つ強さは、ひと言で言えば「子どもならではの」「子どもらしい」といった形容詞が付けられるものなのだろうが、誰もが子どもだったことを思えば、それは普遍的な魅力であるだろう。その普遍的な魅力に触れて、「元子ども」の現役ミュージシャンや業界関係者たちが感化された部分も少なからなかったはずだ。結局のところ、大人たちはこの日、音楽シーンの未来に向けた可能性とともに、現在を生きている活力も合わせて受け取らせてもらったのかもしれない。